

思い出は

桜のように散り

色づいていく

登場人物

松田陽葵	(16)	(6)	高校2年生・継承者
村田隆二	(16)	(6)	陽葵のクラスメイト
中村桃花	(16)	〃	
清水拓海	(16)	〃	
森田智子	(16)	〃	
松田麻美	(40)	(20)	陽葵の母
松田秀人	(44)	(24)	陽葵の父
松田愛	(14)		陽葵の妹
橋本千代子	(72)		橋本家当主
柴崎弘子	(65)		柴崎家当主
岩崎豊	(69)		岩崎家当主
古賀和彦	(67)		古賀家当主
柴崎悠斗	(11)		次期継承者
西村茜	(11)		悠斗のクラスメイト
羽村雄二	(50)		依頼者
羽村祥子	(15)		羽村の娘
古賀洋子	(30)		前継承者

○松田家・儀式の間

板戸で仕切られた6畳ほどの和室。
四隅に置いてある和紙燭台が部屋を灯す。

部屋の中央には松田陽葵（ひまり・16）とむせび泣く羽村祥子（15）

陽葵は巫女装束の上に千早を羽織っている。

2人の手には蠟燭が立てられた手持ち燭台。

祥子の方にだけ火が灯っている。

陽葵、右手の人差し指と中指を立て、口元に置く。

陽葵「身魂蝕む悲しみを払い、胸中締め付ける、固く結ばれた痛みを解こう。時は再び動き出す。消えゆく悲哀と共に」

蠟燭の火が消え、むせび泣く声と涙が止まる。

陽葵の持つ蠟燭に火が灯る。

○同・門

門の前には巫女装束を着た陽葵と松田

麻美（40）橋本千代子（72）

向かいには祥子と羽村雄二（50）

羽村「中学生になってからいじめられるようになったんです。それから学校は疎か、人が怖くなって家からも出られなくなった。

千代子さんから話を伺った時は耳を疑いしました。悲しみを消せる人間がいるなんて言うから」

陽葵「（ぼそっと）消せるわけないじゃん」

羽村「え？」

千代子「戻ってる」

陽葵、千代子を一瞥し家に戻って行く。

羽村「気に障ること言ってしまったか？」

千代子「お気になさらずに」

麻美、家に入って行く陽葵を見る。

千代子「気分はどう？」

祥子「あれだけ辛かったのが嘘みたいです。

いじめられたことを思い出しても、今は何

ともない」

千代子「悲しみを消し去り、心を生き返らせる。それがあの子の持つ力。私たちは悲葬（ひそう）と呼んでる」

羽村「陽葵さんには感謝しています。お礼はちゃんとさせて頂きますので」

千代子「いいんですよ。娘さんが救われればそれで」

羽村「いえ、そういうわけにはいきません。

またお伺いさせていただきます」

千代子「そうですか。お待ちしています」

羽村「本当にありがとうございます。陽葵さんに感謝していたとお伝えください。では失礼します」

羽村と祥子、会釈して正面にある車に向かって行く。

羽村は嬉しそうな顔で祥子に話しかけている。

千代子「午後は次の後継者を紹介する。あの子も連れてくるように」

麻美「はい」

○同・居間

陽葵、縁側に座ってる。

そこに松田愛（14）が入って来る。

愛「終わった？」

陽葵「うん」

愛「桜見に行こう」

陽葵「着替えてくる」

居間を出ようとする。麻美が来る。

麻美「千代子さんの家で後継者を紹介する。」

陽葵の後に力を受け継ぐ子」

愛「良かったねお姉ちゃん。やっと力が失くなる」

陽葵「良いことなんて何もない。苦しみが続いていくだけ」

陽葵、居間を出る。

○さきたま古墳公園・丸墓山古墳

陽葵と愛、墳頂に続く階段を登る。

墳頂に着くと満開の桜。

愛「やっぱり綺麗だよね、ここの桜」

陽葵、桜を見てる。

愛、墳頂から広場を見下ろす。

愛「お姉ちゃん」

陽葵、愛の隣に行き見下ろすと、広場には満開の桜が並んでいる。

その周りは花見客で賑わっている。

愛、スマホを取りだし写真を撮る。

愛「お姉ちゃんも撮りなよ」

陽葵「私はいい」

景色を眺める陽葵。

○同・桜のトンネル

道の両側に満開の桜が並んでいる。

陽葵と愛、歩いている。

左側には広場が見え、花見客や子供たちが遊んでいる。

陽葵、広場で絵を描いている村田隆二（16）を見つける。

愛「あの絵を描いてる人、毎年見かけるね」

陽葵「うん」

愛「お姉ちゃんと同じ年くらいじゃない？」

陽葵「同じ年だよ」

愛「知ってる人？」

陽葵「同じクラス」

愛「うそ？手振れば」

陽葵「ちゃんと話したことないから」

愛「同じクラスなのに？」

陽葵「うん」

愛「お姉ちゃん友達作れば。もう少しで終わ

るんだし。迷惑も掛からないでしょ？」

陽葵「私はいい。辛くなるだけだから」

愛「悪い人ばかりじゃないよ」

陽葵、隆二を見てる。

○中央通り

陽葵と愛、歩いている。

愛「来年はお花見しようよ」

陽葵「うん」

道路を挟んだ反対側の歩道に高橋（11）と佐藤（11）が走っている。

その後ろから2人を追いかける柴崎悠

斗（11）

悠斗「待ってよ」

高橋「待たねえよバカ」

佐藤「追いつかれたら菌がうつるぞ」

陽葵、去って行く3人を見ているとフラッシュバックが起こる。

○回想・校舎裏

祥子、数人の生徒に囲まれる。

祥子「お願い許して」

生徒A、バケツを持っている。

生徒A「お前汚れてるから洗ってやるよ」

と言い、祥子に水をかける。

祥子、びしょ濡れになり立ちすくむ。

生徒A「行こうぜ」

生徒たちが去って行くと、祥子が泣き崩れる。

○中央通り

陽葵、立ち尽くしている。

隣にいる愛が陽葵に声を掛ける。

愛「お姉ちゃん？」

陽葵、涙を流しその場に崩れる。

愛、陽葵の背中をさすりながら悲しげに陽葵を見る。

○松田家・陽葵の部屋

ベッドで横になっている陽葵。

その隣で心配そうに陽葵を見ている愛。

ドアが開き、麻美が入って来る。

麻美「そろそろ準備して。時間だから」

愛「フラッシュバック。さっきの女の子の」

麻美「・・・」

愛「今日は無理だよ。変えてもらって」

陽葵、起き上がる。

陽葵「大丈夫。少し落ち着いたから」

愛「無理しなくていいよ」

麻美「支度できたら降りてきなさい」

麻美、部屋を出て行く。

愛「お姉ちゃん・・・」

陽葵「大丈夫」

と微笑み、支度を始める。

○走る車内

運転席に麻美。後部座席には陽葵。

陽葵、憂鬱に窓の外を眺める。

麻美、バックミラー越しに陽葵を見る。

○橋本家・客間

広々とした和室に一枚板の長い座卓。

上座側に岩崎豊（69）千代子、悠斗、

柴崎弘子（65）古賀和彦（67）が

座椅子に腰かけている。

5人の後ろには柴崎美穂（36）

下座側に陽葵と麻美。

陽葵、悠斗を見ている。

千代子「お前が悲葬の力を継いで、もうすぐ
10年が経つ。掟に従いその力を後継に繋

いでもらう。次の10年は柴崎家長男が引き継ぎ使命を全うする。お前もそうだったように前任者が後継に教授する」

悠斗、キョトンとしている。

岩崎「千代さん、今日悲葬の力を使った娘はどうだった？」

千代子、美穂に視線を送る。

美穂「悠斗、行こう」

美穂、悠斗を連れ出し部屋を出る。

千代子「仮も出来た今なら、見合いを申し入れても受け入れるだろう。岩崎、お前の孫は今年大学生だったな？」

岩崎「ああ、そうだが」

千代子「なら岩崎家に嫁いでもらおう」

岩崎「父親は商社の社長だったな。悪くない」

弘子「あんたの孫、確か相手がいたろ」

岩崎「なら別れさせればいい。どうせ身分の合わない相手だ。相応しい相手と結婚できるなら問題ないだろ」

弘子「だいぶ落ちぶれたもんだね。一族の歴

史と伝統ってやつも」

岩崎「口を慎め。その歴史と伝統を守る為
にやってることだろ」

千代子「では決を取る。異論ある者は挙手を」

陽葵、手を挙げる。

岩崎「お前は一族の長じゃないだろ。決める
権利なんかない。出しゃばるな」

陽葵、岩崎を睨む。

弘子「そう怒鳴るな。麻美んところのお嬢ちゃ
んもいずれ長になるんだ」

岩崎「今は違うだろ」

千代子「話しを進めるぞ。異論がない者は」

岩崎、千代子、麻美が挙手する。

千代子、古賀を見ると渋々手を挙げる。

千代子「決まりだ。これも全て一族の繁栄の
ため。皆、尽力してくれ」

○修蘭高校・昇降口（朝）

生徒たちが登校している。

隆二、下駄箱で靴を履き替えていると、

清水拓海（16）が来る。

拓海「よう」

隆二「おう」

そこに陽葵が来て、靴を履き替える。

拓海「松田おはよう」

陽葵、無視する。

隆二、陽葵を見ると視線が合う。

陽葵「おはよう・・」

隆二「おはよう」

陽葵、去って行く。

拓海「おはようって言ったの俺だよな」

隆二「うん」

拓海「でもおはようって返したのはお前にだ

よな」

隆二「うん」

拓海「おはようの転売だよな」

そこに林（36）が来る。

林「村田、お前図書委員だよな」

隆二「はい」

林「新しい本届いたから、図書室に持ってく

の手伝ってくれ」

隆二「分かりました」

林、職員室に向かう。

拓海「先、教室行ってるぞ」

隆二「うん」

○同・2年1組（朝）

生徒たちが話したりしていて騒がしい。

中村桃花（16）がうつ伏せで座って

いる。前の席には森田智子（16）

桃花の後ろの席には本を読む陽葵。

智子「もっと良い人いるから」

桃花「もうヤダ、死にたい」

拓海が来て、桃花の隣に座る。

拓海「どうしたの？」

智子「彼氏に浮気された挙句、最初から好き

じゃなかったっていうボディからのストレ

ート。で、とどめに向こうから別れよう」

拓海「そんな奴と別れられて良かったじゃね

ーか」

桃花「でも好きだった」

拓海「もつと良い人いるから」

桃花「どこに？」

拓海「南米あたり」

桃花「何で海を跨ぐのよ。ああー、もう無理。

裏切られるなら、初めから好きになんてならなければ良かった」

陽葵「（ぼそっと）バカみたい」

桃花、振り返り陽葵を見る。

桃花「今何て言った？」

陽葵、無視して本を読んでいる。

桃花、本を取り上げ

桃花「聞いてんの？」

陽葵「人なんて裏切るのが当たり前。なんで裏切られないと思ったの？バカみたいに赤の他人信用するからそうなるんでしょ」

桃花「あんたに言われる筋合いなんかない！恋もしたことないんでしょ？その前に友達もいなさそうだもんね」

智子「やめなっ」

周りの生徒たちが2人を見てる。

陽葵「別に友達なんか欲しいと思わない。1人になりたくないから作ってるだけでしょ。

ただの寄せ集め。都合が悪くなったら簡単に裏切る。人なんてそんなもの」

桃花「いつも1人にいるから性格歪んでるんじゃない？だから友達も出来ないんだよ。きつと一生1人だよ、あんたみたいな奴」

拓海「言い過ぎだぞ」

陽葵、教室から出て行こうとする。

桃花「ちよつと、まだ終わってない」

陽葵、立ち止まり

陽葵「真っ直ぐ生きられるならそうしたかった」

陽葵、教室を出る。

桃花「何あいつ」

○同・図書室

桃花、拓海、智子、机を囲む。

桃花「ほんと最悪。こっちは死にたいくらい

落ち込んでるのに。傷口に塩と豆板醤塗ら
れた気分」

智子「味付けしないで」

拓海「まあ、少し気が紛れて良かったんじゃ
ねーの」

桃花「紛れてない。紛れるどころか、名刺持
って挨拶しにきた」

智子「学校終わったらどこか行く？ すっきり
するまで愚痴聞くから」

桃花、智子を見る。

智子「何？」

桃花「優しきを見せないで。泣くから」

そこに隆二が来て、桃花の前に数冊の
本を置く。

隆二「桃花が好きそうな本探してきた。読ん
でる時は忘れられると思って」

桃花、涙ぐむ。

桃花「拓海、私を罵倒して。涙腺が決壊する」

拓海「アホ、バカ、間抜け」

智子「小学生か」

桃花、手で顔を覆う。

桃花「もう無理」

拓海「ボケ、ハゲ、すつとこどっこ・・・」

○同・2年の廊下

昼休みの廊下。

桃花、拓海、智子、歩いて来る。

桃花の両手には丸められたティッシュユが溢れている。

桃花「ティッシュ」

智子、ポケットティッシュを取り出し

桃花の鼻をかむ。

拓海「鬼の子、人でなし、悪魔」

智子「もういいわ」

教室に入ろうとすると陽葵が出てくる。

陽葵、桃花の持ってるティッシュユを見る。

桃花「泣いちゃ悪い？」

陽葵「何も言っていないけど」

桃花「そういう目してるじゃん」

智子「やめなっ」

桃花「あんたには分からないよ、この辛さが」

桃花、教室に入って行く。

智花「桃花」

智子、桃花の後を追う。

拓海「ああ見えて、結構落ち込んでるからさ。

分かってやってとは言わないけど・・・」

陽葵「人の痛みは誰よりも知ってる」

陽葵、去って行く。

拓海、陽葵の後姿を見てる。

○同・昇降口

下校する生徒達が靴を履き替えている。

その中に、隆二、桃花、拓海、智子。

桃花の手にはティッシュケース。

智子「じゃあファミレスで待ってる」

隆二「うん」

隆二、去って行く。

拓海「まだ泣いてんの？」

桃花「うるさい」

○同・図書室

隆二、図書室に入ると、本を持った陽葵が受付の前に立っている。

隆二「返却？」

陽葵「うん」

陽葵、隆二に持っている本を渡す。

隆二、本に付いてる貸し出しカードにサインして、受け付けの棚に置く。

隆二「桃花と喧嘩したって」

陽葵「・・・」

隆二「何かあった？」

陽葵「羨ましかっただけ。ただの嫉妬」

陽葵、図書室を出て行く。

隆二、陽葵の後姿を見ている。

○県道・歩道

陽葵、歩いている。

黒塗りのセダンが陽葵を追い越し、少し先で停まる。

後部座席が開くと、羽村が出てきてお

辞儀をする。

○ファミレス

桃花、拓海、智子が席に着いてる。

テーブルにはドリンク。

桃花「浮気されて、好きじゃないって言われて、おまけに向こうから別れを告げるクソ野郎だけど、思い出すのは楽しかったことなんだよね。辛いとこだけ消えれば、綺麗なまま思い出しにしまえるのに」

拓海「そんな都合のいいことないだろ」

桃花「分かってるけどさ」

桃花、入口の方を見るとメニューを取り、顔を隠す。

拓海「何やってんの？」

桃花「伏せて」

智子「何で？」

桃花「いいから」

拓海と智子、戸惑いながら伏せる。

桃花、メニューから顔を覗かせる。

拓海と智子も桃花の視線の先を見る。
入口には店員に案内されてる羽村と陽
葵。反対側に歩いていく。

拓海「松田だ」

智子「お父さんかな？」

桃花「いや、あれはパパ活」

拓海「さすがに違うだろ」

桃花「いや、絶対パパ活。あの女の正体を
暴いてやる。この町のためにも」

智子「町関係ないでしょ」

○同・陽葵の席

隣の席とは仕切りがある4名席。

そこに、陽葵と羽村が座っている。

テーブルにはドリンク。

桃花、ばれないように隣の席に隠れる。

○同・拓海たちの席

拓海と智子、桃花を見ている。

智子「ほんとは行ったよ」

拓海「俺は知らない」

○同・陽葵の席

向かい合う陽葵と羽村。

羽村「陽葵さんには感謝しています。あれから娘も笑えるようになって、少しずつですが前に進めています」

陽葵「・・・」

羽村「聞きたかったんですが、娘はいじめられたことは覚えてるんですよね？」

陽葵「記憶に付属してる感情を取り払っただけ。いじめられた過去を消したわけじゃない。思い出すことはある。でも苦痛は感じない。当時は辛かったけど、今振り返ったら何ともない。簡単に言ったらそんな感じ」

仕切りを挟んだ隣の席で、桃花が不思議そうに聞き耳を立てている。

羽村「いじめられた記憶はいくつもあります。その全部の悲しみが消えたんですか？」

陽葵「同じ悲しみでも、失恋やいじめ、大切

な人を亡くす。それぞれで種類が違う。ほとんどの感情は思い出と連結してる。悲しみを消すときに1つの出来事を想起させ、その過去と感情に繋がる悲しみを全て消し去る。それがこの力」

羽村「そうですか。なら大丈夫かもしれません。他人の悲しみを消せるなんて半信半疑だったんですが、頼んで正解でした」

桃花、仕切り越しに陽葵の方を見る。

○同・入口

隆二、店内に入って来ると桃花の姿が視界に入る。

○同・桃花の席

桃花、仕切り越しに聞き耳を立てる。

隆二の声「何やってんの？」

桃花、人差し指を口に当てる。

隣の席の陽葵が振り返り隆二を見る。

隆二「松田」

陽葵、仕切りの上から隣の席を覗くと、
桃花と目が合う。

桃花「どうも」

○さきたま古墳公園・レストハウス

陽葵と桃花、ベンチに座っている。

隣のベンチには隆二、拓海、智子。

陽葵「さっきの話は誰にも言わないでほしい」

桃花「悲しみを消せるって本当なの？」

陽葵「・・・」

桃花「言わないで上げる。ただし、私の悲し

みも消して。それが条件」

陽葵「・・・分かった」

○松田家・門

門の前に立つ陽葵、隆二、桃花、拓海、
智子。

桃花、口を半開きにしながら奥にある

2階建ての大きな日本家屋を見ている。

桃花「でか」

拓海「豪邸じゃないですか、松田さん」

陽葵「入って」

5人、敷地内に入って行く。

○同・玄関

玄関の扉が開き、陽葵、桃花、拓海、

智子、隆二が入って来る。

智子「お邪魔します」

そこに愛が来る。

智子「こんにちは。陽葵さんのクラスメイト
です」

愛「(嬉しそうに)いらっしやい」

愛、隆二を見ると

愛「あっ」

一同、隆二の顔を見る。

拓海「知り合い？」

隆二、首を横に振る。

陽葵「上がって」

一同、靴を脱ぎ家に上がる。

陽葵「愛、3人を客間に案内して」

愛「3人？」

陽葵「それと、装束も用意してほしいの」

愛、驚いた顔で陽葵を見る。

陽葵「頼まれたから」

愛「みんな知ってるの？どうなるかって」

隆二、愛を見る。

拓海「何が？」

陽葵、桃花を見る。

陽葵「着いて来て」

陽葵、廊下を進んでいく。

桃花、不安そうに陽葵について行く。

愛「3人はこっち」

愛の後をついて行く3人。

○同・客間

隆二、拓海、智子、愛が座卓を囲む。

愛「他にこのことを知ってる人は？」

智子「たぶん私たちだけだと思う」

愛「誰にも言わないで。絶対に」

拓海「本当に悲しみを消せんの？」

愛「・・・」

隆二「分かった。誰にも言わない」

愛、立ち上がり廊下に行く襖を開け

愛「消せないよ。なんにも」

と、眩くように去って行く。

○同・儀式の間

四隅にある和紙燭台が部屋を灯す。

部屋の中央には陽葵と桃花が座る。

陽葵は巫女装束の上に千早を羽織って

いる。お互いの手には手持ち燭台。

桃花「これどうするの？もう始まるの？」

陽葵「悲しみを消せるのは1度だけ。だから

よく考えて」

桃花「もう決まってる」

陽葵「その記憶を頭に思い浮かべて」

桃花、目を閉じ想起する。

少しすると、桃花の持つてる燭台の蠟

燭に火がつく。

陽葵「辛苦に染まる記憶の錠を開放し、連な

る悲しみを胸臆の底からすくい上げる」

桃花、目を開くと涙が溢れ止まらなくなる。

桃花「何これ、勝手に・・・」

桃花、表情が崩れていき、むせび泣く。

陽葵、右手の人差し指と中指を立て、口元に置く。

○中央通り（夕）

桃花、智子、拓海、隆二、歩いている。

桃花「悩んでたのが夢みたい」

拓海「マジで消えたの？」

智子「超能力なのかな」

桃花「今なら笑って話せそう」

隆二、愛の言葉を思い出す。

× × ×

（フラッシュバック）

愛「知ってるの？どうなるかって」

× × ×

隆二「忘れ物したから先帰ってて」

智子「私たちも行くよ」

隆二「大丈夫。じゃあ明日」

隆二、踵を返す。

桃花「また明日」

笑顔で手を振る。

拓海「お前の情緒ぶっ壊れてんな」

桃花「だって辛かったんだもん」

○松田家・居間（夕）

麻美、陽葵を叱りつけている。

愛、2人を見てる。

麻美「何でクラスの子に力の事を話したの？」

陽葵「この間来た依頼者の人とたまたま会っ

た。そしたら会話を聞かれた」

愛「他言しないように伝えた」

麻美「それでも分からないでしょ。羽村さん

には強く言うべきだった。今度から気をつ
けなさい。辛くなるのはあなたでしょ？」

陽葵、部屋を出ようとする。

麻美「どこ行くの？」

陽葵「散歩してくる」

愛「私も行く」

陽葵「1人で行きたい」

陽葵、居間を出て行く。

○同・門

隆二、インターホンを押そうとするが躊躇している。と、玄関から陽葵が出て来て視線が合う。

○さきたま古墳公園・広場（夕）

隆二と陽葵、歩いている。

隆二「本当に消えたの？」

陽葵「変な事してないか心配になった？」

隆二「そういうわけじゃないけど、なんか信じられなくて」

陽葵「大丈夫。記憶が消えたわけでもないし、副作用みたいなものもないから」

隆二「超能力とかオカルトとか俺にはよく分からないけど、松田自身には何も無いの？」

陽葵「・・・ねえ、もし辛いこととか苦しんでることがあるなら消そうか？ ついでだし」

隆二「俺はいい。いじめや虐待とか、その人を歪めてしまう悲しみは消えた方がいいと思う。でも消してはいけない悲しみもある気がする。大切なものまで忘れてしまうよな、そんな悲しみも」

隆二、桜を見上げる。

陽葵「絵好きなの？ ここでよく描いてるよね？」

隆二「見られてたんだ」

陽葵「うん」

隆二「美術の教師になろうと思って。それと：まあそんな感じかな」

隆二、再び桜を見上げる。

陽葵、隆二の顔を見てる。

○村田家・隆二の部屋（夜）

隆二、スケッチブックを見ている。

スケッチブックには拙い桜の絵が描か

れている。
捲るたびに桜の絵が上手くなっていく。
最後のページは色使い、質感、本物同様の絵となっている。

○高等学校・2年1組（朝）

登校してくる生徒達で騒がしい教室。

桃花、拓海、智子、席で話している。

桃花「何て言ったらいい？」

智子「昨日はありがとう」

桃花「なんか言にくい」

拓海「じゃあ何か奢ってやれよ」

桃花「それだ」

陽葵、教室に入ってくる。

拓海「来たぞ」

陽葵、席に着くと桃花の視線に気づく。

陽葵「何？」

桃花「あのさ・・・放課後空いてる？」

陽葵「何で？」

桃花、拓海を見る。

拓海「自分で言えよ」

隆二が教室に入ってきて来る。

桃花、隆二を見て

桃花「隆二が新しく出来たカフェに行きたい
って言うから行くんだけど、どう？」

隆二に聞こえないように話す桃花。

陽葵、窓際の席に着く隆二を見る。

陽葵「付き合ってた人とそこには行った？」

桃花「行ってないけど。何で？」

陽葵「別に。放課後なら空いてる」

桃花「じゃあ決まりね」

桃花、前を向く。

拓海、冷ややかな視線を桃花に向けて
いる。

桃花「何？」

拓海「別に」

陽葵、隆二を見る。

○古民家カフェ閑居

陽葵、隆二、桃花、拓海、智子がテー

ブルを囲む。

テーブルにはスイーツが並ぶ。

桃花「私の奢りだから、遠慮なく食べて」

陽葵「お礼のつもりなら大丈夫。自分の分は自分で払うから」

桃花「それじゃあ私の気が収まらない。なんて言うか・・・その・・・」

隆二「桃花なりに感謝してるみたいだから、受け取ってあげて」

陽葵、困ったような表情。

桃花「ありがとう」

陽葵、桃花を見る。

桃花「おかげで楽になった。それとごめん、言い過ぎた」

陽葵「・・・私も言い過ぎた。ごめん」

智子「じゃあ、食べよっか」

拓海「桃花さん、御馳走になります」

桃花「拓海に奢るなんて言っていないけど」

拓海「お金無いけど」

隆二「警察には悪い人じゃないって説明しと

く」

拓海「お前らとは今日限りで友達やめる。松田、2人で楽しい学校生活送って行こう」

陽葵「やだ」

拓海「ねえ、誰か友達になつて」

一同、笑いあう。

陽葵、その雰囲気に入り相好を崩す。

隆二、陽葵の笑った顔を見て微笑む。

○同・駐車場

店内を出ると駐車場になっており、その先は県道沿いの道。

桃花、拓海、智子、隆二、陽葵、歩いて来る。

拓海「いやー、美味かった」

桃花「次は拓海の奢りね」

拓海「いやー、美味かった」

桃花「こら」

桃花、前から来るカップルを見ると、慌てて拓海の背中に身を隠す。

拓海「何だよ」

仲睦まじそうに長嶋裕也（22）と派
手な格好をした女が歩いて来る。

長嶋「このカフェ最近出来たみたいでさ、
結構しゃれてんだよね」

女「へー・・・あつ、女の子に聞いたんでしょ？」

長嶋「ちげーよ、たまたま見つけた」

女「ほんとにー？」

陽葵、長嶋を見るとフラッシュバック
を起こす。

○回想・ほこすぎ橋（夜）

長嶋、早足で歩いている。

桃花、後ろから追いかけてくる。

桃花「待ってよ」

長嶋の腕を掴み振り向かせる。

長嶋、呆れた表情を向ける。

長嶋「お前面倒くさいんだよ。一緒に居ても
疲れるだけ」

桃花「だから浮気したの？」

長嶋「いや、最初から好きじゃなかったから。
なんとなく付き合っただけ、無駄な時間だ
ったわ」

桃花、目に涙を滲ませる。

桃花「好きじゃなかったの？」

長嶋「だから言ってるじゃん」

桃花、泣きそうになるのを堪えている。

長嶋「もう別れよう。そっちの方がお互いの
ためでしょ。じゃ」

長嶋、去って行く。

桃花、堪えきれず涙を流し、その場に
崩れる。

○同・入口

長嶋と女、店内に入って行く。

桃花「あれ元カレ」

拓海「マジ？」

桃花「私がこの店教えてやったのに」

隆二、陽葵を見ると涙を流している。

隆二「松田？」

陽葵、その場に泣き崩れる。

智子「大丈夫？」

陽葵、むせび泣いている。

○松田家・客間

隆二、桃花、拓海、智子、座卓を囲んでいる。そこに、愛が入って来る。

隆二「松田は？」

愛「落ち着いたみたい」

愛、座卓に着き桃花を見る。

愛「どんな記憶から悲しみを消した？」

桃花「どんな？・・失恋」

愛「その人との思い出の場所に行ったりした？」

桃花「今度行こうとは約束したけど、一緒には行ってない」

拓海「でも店出たら会ったけどな」

桃花「ムカつくから思い出させないで」

愛「それだ」

智子「え？」

桃花「そういえば誘った時に聞かれた。付き合ってた人で行ったことあるかって」

隆二「悲しみを消すことと、何か関係あるの？」

愛「・・・」

桃花、愛を見てる。

隆二「あるなら教えて。俺達に責任があるから」

愛「・・・みんなはお姉ちゃんと友達なの？」

拓海「友達と言われると・・・」

智子「ちゃんと喋ったの今日が初めてかも」

愛「じゃあ、力を使うために一緒にいただけ？」

桃花「・・・」

隆二「今日初めて笑ってる顔を見て、松田もこんな表情もするんだなって。新しい所を知れて嬉しかった。向こうはどう思ってるか分からないけど、俺は友達になりたい」

桃花「元はと言えば私が頼んだことだし、力を使うことで何か悪いことがあるなら、その責任は私にある。だから言っ」

愛「・・・分かった。お姉ちゃんが持つ力のこ

とを教える」

○松田家・陽葵の部屋（夕）

陽葵、ベッドの上で横になっている。

ドアがノックされる。

愛の声「入っていい？」

陽葵「うん」

愛、入って来てベッドの横に座る。

愛「クラスの子に話した。悲葬のこと」

陽葵「お母さんに怒られるよ」

愛「内緒にすればいい」

陽葵「・・・なんか言ってた？」

愛「ショック受けてた。自分のせいだって。

あと、友達になりたいって」

陽葵、愛を見る。

愛「お姉ちゃんが笑ってるところなんてずっ

と見てなかったのに。なんかショック」

陽葵「そんなことも言ってたの？」

愛「友達になれるといいね」

陽葵「そんなんじゃないよ」

陽葵、愛に背中を向ける。

愛「照れてるでしょ？」

陽葵「別に」

愛、陽葵を見て微笑む。

○村田家・隆二の部屋（夜）

物思いに耽る、隆二。

○回想・松田家・客間

隆二、桃花、拓海、智子、愛の話聞いてる。

愛「お姉ちゃんが持つ力は悲葬と言って、記憶に付属する悲しみを他者から自分に移す」

桃花「消すんじゃないかって？」

愛「正式には悲しみを背負う」

智子「背負うってどういうこと？」

愛「依頼者の悲しみを儀式で移す。その時点でお姉ちゃんが背負うから、依頼者は辛かったのが嘘みたいに無くなる」

桃花「確かに無くなった」

愛「ただ、移した際に悲しみの根源となる記憶も付いてくるの。その記憶に関わる出来事や象徴、場所、人物に触れるとフラッシュバックする」

智子「写真やテレビとかでも？」

愛「それは大丈夫。実際に目にしたもののだけ。フラッシュバックすると、その時に抱いた感情を同じように体験する」

隆二「泣きたいほど苦しかったら、松田も同じように涙を流す」

愛「そう。ただし同じ記憶のフラッシュバックは一回限り。それ以降はない」

桃花「私のせいで・・・」

愛「今まで多くの悲しみを背負ってきた。その度に辛い過去が頭の中に映る。裏切られた人。いじめにあった人。手を上げられた人。人間の悪い部分を幼い頃から見えてきたから、人を信用出来なくなったの」

桃花「・・・」

愛「悲葬の力は10年ごとに継承者を変える。

もうすぐその10年。でも今まで見た辛い過去は消えない。家族以外に信用できる人がお姉ちゃんにもいてほしい。辛い思い出しか持っていないから。だから、絶対に傷つけないで」

隆二「約束する」

○村田家・隆二の部屋（夜）

物思いに耽る、隆二。

○高等学校・校門（朝）

生徒達が登校している。

その中に昇降口に向かう陽葵の姿。

隆二の声「松田」

前を向くと、隆二、桃花、拓海、智子。

隆二「妹に聞いた。悲しみを消すんじゃないくて、自分が背負うってこと。そのせいでフラッシュバックすることも」

桃花「ごめん、私のせいで辛くさせて」

陽葵「気にしなくていいよ。いつものことだ

から」

桃花「友達になってほしい」

陽葵、桃花を見る。

桃花「今まで辛い思い出ばっかりだって聞いた。でもこれからは、楽しい思い出を作っ
ていきたい。一緒に」

陽葵「妹に言われた？」

桃花「私たちの意思」

隆二「俺達も一緒に背負わせて」

陽葵、隆二を見る。

○中央通り

隆二、陽葵、桃花、拓海、智子、歩いて
いる。

拓海「どこ行こうか」

桃花「映画行こうよ」

拓海「いいね」

陽葵、浮かない顔で俯く。

隆二「どうした？」

陽葵「電車乗れない」

智子「フラッシュバック？」

陽葵、頷く。

拓海「そういえば俺、映画観るなって医者に止められてたんだ」

桃花「私も映画観たら内臓が破裂するって外科医に言われてた」

智子「どんな病気」

陽葵「フフ」

隆二、陽葵の笑った顔を見て微笑む。

桃花「じゃあさ・・・」

○公園

拓海、目を閉じ数を数えている。

拓海「4・・・5・・・6・・・」

隆二、隠れる場所を探している。

視界に遊具が映る。

遊具にはトンネルがあり、入ろうとする
と中に陽葵が座っている。

隆二、場所を変えようとするが

拓海「7・・・8・・・9・・・」

陽葵、隆二の袖を掴む。

○同・遊具のトンネルの中

トンネル内で座っている陽葵と隆二。

隆二「この歳になってかくれんぼするなんて
思わなかった」

陽葵「でも悪くないかな」

隆二「かくれんぼ好きなの？」

陽葵「そうじゃない。こんな何気ない、よく
ある日常が私にとっては特別だから」

隆二「かくれんぼする高校生は中々いないけ
ど」

陽葵「確かに」

隆二「何で桃花の悲しみを背負ったの？」

陽葵「頼まれたら断れない。掟で決まってる
の。それと・・思い出に近づきたかった」

隆二「思い出？」

陽葵「6歳からこの力を受け継いで、人の悪
い部分を沢山見てきた。だから裏切られる
のが怖かった。でも1つだけ大切にしている

思い出がある。その思い出の中にいると優
しくなれるの。私の宝物」

隆二「どんな思い出？」

陽葵「内緒」

隆二「言っつてよ」

陽葵「絶対教えない」

隆二「拓海にここにいるって言うよ」

陽葵「そっちも見つかる」

隆二「道連れにする」

陽葵「最低」

2人、笑いあう。

拓海の声「見っけ」

隆二と陽葵、入口を見ると拓海がいる。

拓海「何で同じ場所？」

○市役所・展示室

いくつつかの絵が並んでいる。

陽葵、隆二、桃花、拓海、智子、絵を
見ている。

絵には満開の桜とそれを見る2人の少

年と少女が手を繋いでる。

絵の下には「村田隆二作」と書かれて
おり本人のコメントも添えられている。

桃花「隆二が中学生の時に描いた絵だって」

智子「コンクールで賞取ったんでしょ？」

隆二「うん」

拓海「グラミー賞だっけ？」

智子「それ音楽だから」

桃花、コメント欄を読み上げる。

桃花「賞を頂けて光栄です。僕は修蘭高校に
入学しようと思っています。ありがとうございます

ございました」

拓海「何で入学する高校宣言してんの？」

隆二「聞かれたのかな」

桃花「こんな時に聞く？」

陽葵、絵を見ている。

○回想・市役所・展示室

いくつかの絵が並んでいる。

中学の制服を着た陽葵。

隆二が描いた桜の絵を見ている。

○市役所・展示室

陽葵、桜の絵を見ている。

桃花の声「行こう」

隆二たちは先に出口に向かっていく。

陽葵「うん」

絵を見る陽葵。

○中央通り（夕）

分かれ道に立つ隆二、陽葵、桃花、拓

海、智子。

拓海「じゃあまた明日な」

桃花「バイバイ」

桃花、拓海、智子、去って行く。

隆二と陽葵、反対側に歩き始める。

陽葵「初めてかも、家族以外とどこかに行っ

たの

隆二「どうだった？」

陽葵「悪くはないかな」

隆二「良かったってことでいい？」

陽葵「それはどうかね」

隆二「素直じゃないな」

陽葵、口元を綻ばせる。

○同・横断歩道（夕）

愛、信号待ちをしていると反対側の歩道から隆二と陽葵が歩いて来る。

愛、楽しそうに話してる2人を見て、物陰に隠れる。

再び、2人を見ると陽葵が笑っている姿が目映る。

愛、微笑む。

○松田家・居間（夜）

陽葵、愛、麻美、松田秀人（44）が食卓を囲む。

松田「もうすぐだよね、何とかの力が終わるの？」

愛「悲葬」

松田「前から思ってたんだけどさ、何で悲しみを葬るって書いて悲葬なの？消してる訳じゃないんでしょ？」

愛「お母さんに聞いてないの？」

松田「血筋に関係ない者は詮索するな。千代子さんにそう言われた」

愛「一族の繋がりがりなんて無くなればいいのに」

麻美「歴史と伝統。愛が不自由なく暮らせるのはこの2つがあるから」

愛「でも決められた人と結婚しないとイケないでしょ。私は絶対嫌だからね」

麻美「今までみなそうして来たの。愛だけ特別とはいかない」

愛「でもお姉ちゃんは彼氏出来そうだよ」

麻美、陽葵を見る。

松田「そうなの？」

陽葵「いないよ」

愛「こないだ家に来た人と楽しそうに歩いてたじゃん」

陽葵「あれは・・・」

愛「ごちそうさま」

愛、食器を持って部屋を出る。

麻美「陽葵、この家系に生まれたなら伝統は守りなさい」

陽葵「歴史や伝統がそんなに大事？」

麻美「当たり前でしょ」

陽葵「歴史や伝統が変わらなくても、時代は変わっていく。そして人の価値観も。植え付けられた考えじゃなく、大切なものぐらい自分で決める」

陽葵、食器を持って部屋を出ていく。

松田、陽葵の後ろ姿を見てる。

○同・陽葵の部屋（夜）

陽葵、スマホを見てる。

スマホには5人で撮った写真。

写真を見て微笑む陽葵。

○さきたま古墳公園

緑が生い茂った桜の木が並ぶ。

○修蘭高校・昇降口（朝）

陽葵、桃花、智子、入って来ると、隆二と拓海が靴を履き替えている。

桃花、そーっと近づき、驚かすように

桃花「おっはよ」

拓海「びっくりした」

陽葵、隆二と目が合う。

陽葵「おはよう、隆二」

隆二「おはよう、陽葵」

○同・2年1組

隆二、陽葵、桃花、拓海、智子、弁当を食べている。

拓海「今日ゲーセン行かね」

桃花「またUFOキャッチャーやるの？」

拓海「朝の占い5位だったから今日は取れる」

智子「1位の時に出直してきて」

桃花「まあ、行く所ないしいいか」

拓海「じゃあ決まり」

陽葵「ごめん、私用事がある」

隆二「俺も図書委員の仕事ある」

桃花「じゃあ今日は中止」

拓海「えー」

○橋本家・客間

陽葵と悠斗、座卓を挟んで座っている。

上座には千代子。弘子は離れたところで壁にもたれて座っている。

座卓の上には書物が開かれている。

書物には、円状に橋本家、岩崎家、古賀家、松田家、柴崎家と書かれている。

家系の間には右回りで矢印が出ている。

陽葵「10年ごとに悲葬の力を継いでいくの。

今は松田家。その後は柴崎家に力が渡る」

悠斗「何で10年ごとに変わるの？」

陽葵「この5つの家系は元々同じ村にいたの。

ある時その村に傷を負った神が訪ねて来た。

村人は神を手当てし、その報恩として、悲しみを消す力を村人に与えた」

悠斗「悲しみを消すの？背負うって聞いたよ」

弘子「欲に目がくらんだんだよ」

千代子、弘子をねめつける。

弘子「神は力を与える際に条件を付けた。私利私欲で力を使わないこと。人のために役立つこと。最初はそれを守った。だが欲に眩んだ村人は噂を聞きつけやって来た人間から金銭を求めるようになった」

悠斗「神様に怒られるよ」

弘子「だから罰が与えられた。悲しみ消すのではなく背負わせる。そしていくつかの掟を設け、1つの家系だけが力を与えられた。4つの家系は掟を破らぬよう監視役を務め、10年ごとに力を継ぐことで均衡を保つ。掟を破れば新たな罰が与えられることになった」

悠斗「罰って何？」

陽葵「力が失われ記憶が消える」

悠斗「記憶喪失になるの？」

陽葵「今まで出会った人やそれに関わる記憶だけが消える」

悠斗「絶対嫌だ」

千代子「掟を守っていれば大丈夫だ。数百年に及びこの力で多くの人間を救ってきた。

その歴史と伝統を守るのがお前の役目だ」

陽葵「歴史とか伝統とか、随分聞こえの良い言い方するんだね」

千代子「私は守りたいだけだ。先祖たちが築き上げたものを」

客間の襖が開き、美穂が入って来る。

美穂「皆さん到着されました」

と、言うと岩崎、古賀、麻美、羽村が入って来る。

美穂「悠斗、来て」

悠斗、美穂のもとに行き、2人で客間を出る。

麻美「陽葵も外して」

陽葵、立ち上がり部屋を出て行こうとする

羽村「この間は申し訳ありません。私の不注意でクラスの子に話を聞かれてしまって」

陽葵「別に大丈夫」

陽葵、部屋を出て行く。

一同、座卓に着き千代子が口を開く。

千代子「娘さんはどうです？」

羽村「少しずつですが、笑顔も見られるようになりました」

岩崎「それは良かった。これも全て悲葬の力のおかげ。力がなければ、一生傷を背負って家に籠ってたでしょう。娘さんが救われて本当に良かった」

羽村「ええ、感謝しています」

岩崎「だけどね、悲葬の力って言うのは代償があるんですよ」

羽村「代償？」

岩崎「実は悲しみを消すのではなく、背負うんです。私は見られないのですよ。まだ17歳の子が、赤の他人の悲しみに傷ついている姿が」

羽村「どういうことですか？おっしゃる意味が分からないのですが・・・」

千代子「あなたの娘が持っていた悲しみを、
あの子に移したんです。その目で見てたで
しょう？娘さんが苦しんでた姿を。それと
同じことが麻美の娘に起きています」

羽村「初めに言っていただければ断りました」

岩崎「そういうと思ったから言えなかったん
ですよ。でも娘さんは救ってあげたい。一
生家の中に閉じこもって老いてくのは、親
として見たくないでしょ？」

羽村「・・要求は何です？」

千代子「娘さんを岩崎の孫に嫁がせたい」

羽村「孫？」

岩崎「まだ一八歳なっただばかりですが、経営
者や政治家などのコネもあります。先は安
泰ですよ」

羽村「好きでもない相手と結婚しろと？それ
に娘はまだ15歳ですよ？」

千代子「力がなければ結婚も出来なかったら
う。いじめられた記憶は考えや性格を歪ま
せる。人を信用出来なくなり、最悪命を絶

っていたかもしれない。もちろん、羽村さんの気持ちも理解できる。だが娘さんは心が強くなったわけじゃない。悲しみを取り除いただけ。この先社会に出れば、また同じことが繰り返されるかもしれない。私たちは良き理解者になれる。娘さんがまた傷ついた時、私たちが支えることも出来る。

居場所があれば、力なくとも傷は癒せる」

岩崎「世の中の男なんて、浮気したり暴力を振るったりひどい奴ばかりですよ。そんな男と付き合ったら、また傷つき閉じこもってしまう。孫にはちゃんと saying おきます。絶対に傷つけるなど。それに大企業に就職したら、あなたの会社ともパイプが作れる。娘さんは贅沢な暮らしができて幸せになれる。こんないい条件他にありませんか？」

千代子「よく考えて決めて下さい。悪いようにはしませんよ」

羽村、黙考している。

○同・廊下

陽葵、客間の話を立ち聞きしている。

○走る車内（夕）

運転席に麻美。助手席に陽葵。

陽葵「見返りを求めてはいけない。掟に反してるよ」

麻美「聞いてたの？」

陽葵「・・・」

麻美「見返りを求めていけないのは、悲葬の力を持っている者とその家族だけ」

陽葵「他の4つの一族はそれを監視する」

麻美「そうね」

陽葵「してないじゃん」

麻美、口を閉ざす。

陽葵「自分の子供や孫に、好きでもない相手と結婚させてまで一族を守ることが、そんなに大事？」

麻美「長く続いた歴史と伝統はそんな簡単に変えられるものじゃないの。力の恩恵を受

けていれば尚更」

陽葵の視界に公園の古墳が映る。

陽葵「停めて、歩いて帰る」

○中央通り（夕）

隆二、歩いている。

前には母子が手を繋いで歩いている。

子供「ねえ、桜の公園観に行こうよ」

母「もう桜散っちゃったよ」

子供「だってみんなお花が咲いてる時にしか

行かないんだもん。桜が可哀そうだよ」

母「明日行こっか」

子供「うん」

隆二、2人を見てる。

○さきたま古墳公園・桜のトンネル（夕）

隆二、歩いている。

広場の方を見ると、桜の木を見る陽葵。

○同・広場（夕）

陽葵、桜の木を見上げている。

隆二の声「だいぶ景色が変わるな」

振り向くと隆二。

陽葵「うん」

隆二「桜ってさ、咲いてる時はみんな見に来るけど、散った後は来なくなる。そこに何も無かったように忘れ去られていく。どんな気持ちなんだろう」

陽葵「思い出してほしいからまた色づいていく。忘れ去られるのは辛いから。桜も覚えていてほしいんだと思う」

隆二「幼い頃、女の子に褒められたことがあった。それが絵を描く理由」

陽葵、隆二を見る。

○回想・さきたま古墳公園・広場

桜の絵を描いてる隆二（6）

そこに陽葵（6）が来る。

陽葵「何描いてるの？」

隆二「桜」

陽葵、桜の絵を見る。

陽葵「上手だね」

隆二、スケッチブックから画用紙を一枚切り取る。

隆二「これやるよ」

陽葵「いいの？」

隆二「うん」

陽葵「ありがとう」

陽葵、嬉しそうに桜の絵を見てる。

隆二、陽葵の微笑んでる顔に見入ってしまう。

陽葵「また描いてくれる？」

隆二「来年はもっと上手なの描く」

陽葵「約束だよ」

隆二「うん」

○さきたま古墳公園・広場（夕）

隆二「その拙い桜の絵を褒めてくれたのが嬉

しかった。たった一枚の絵で笑顔を作れる。

絵にはそういう力があるって知った」

陽葵「それで美術の教師？」

隆二「絵を好きになってほしいから。ただその子とはそれが最後だったけど」

陽葵「まだその子のこと待ってるの？」

隆二「もう来ないって分かっているけど、でももしかしたらって・・バカみたいにずっと思ってる」

陽葵、思い出したかのように

陽葵「ねえ、入学する学校を言ったのって：」

隆二「同じ年くらいだったし、あるかなって」

陽葵「フフ」

隆二「笑うなよ」

陽葵「来てくれるといいね」

隆二「もう覚えてないだろうけど」

陽葵「覚えてるよ」

隆二、陽葵を見る。

陽葵「その子もきっと」

陽葵と隆二、桜を見上げる。

○松田家・居間（夜）

陽葵、お茶を飲んでいる。

愛、寝転んでスマホをいじっている。

愛「お姉ちゃん見て」

愛、陽葵にスマホを見せる。

スマホにはアンティークの小物入れ。

愛「可愛くない？」

陽葵「うん」

愛「めっちゃほしい」

陽葵「買ってあげようか？」

愛「いいの？」

陽葵「もうすぐ誕生日でしょ」

愛「でも売ってるお店遠いんだよね。電車じ

ゃないと行けない」

陽葵「ネットは？」

愛「このお店ネット販売してないの。直接見てほしいんだって」

陽葵、考え込んでる。

○同・陽葵の部屋（夜）

陽葵、スマホを見てる。

スマホには隆二の連絡先が表示。
少し考え、発信を押す。

陽葵「今、大丈夫．．お願いがあるんだけど」

○ 駅

隆二と陽葵、構内に入る階段の前で立っている。

陽葵、不安そうな表情。

隆二「やっぱりやめる？」

陽葵「大丈夫」

陽葵、階段を上がって行く。

○ 同・ホーム

電車がホームに入ってくる。

陽葵、目を閉じ不安そうな表情。

隆二、心配そうに陽葵を見る。

電車が止まり、扉が開く。

隆二、陽葵の腕を掴みドア付近に立つ。

ドアが閉まり発車する。

○走る電車内

陽葵、瞼を強く閉じている。

隆二、陽葵を見ているとゴトンという

音が車内に響く。

陽葵、音に反応して目を開く。

隆二の足元にスマホが転がっている。

大学生「すみません」

と、スマホを拾う。

陽葵の目には電車の扉が映っており、

フラッシュバックを起こす。

○回想・走る電車内

混雑した車両。

ドア付近に女子高生が立っている。

ドアから映る景色を見ていると、臀部

に違和感を感じる。

体が固まり、表情が強張って行く。

近くにある手すりを強く握り、恐る恐

る下を見ると、男の腕が女子高生の臀

部に伸びている。

手すりを握る手が震え、一層強く握りしめる。

○走る電車内

陽葵、表情が強張っていき、手が震えだす。

隆二「フラッシュバック？」

陽葵、頷く。

隆二、陽葵の震えた手を握る。

陽葵、握られた手を見る。

隆二「次の駅で降りよう」

陽葵「大丈夫」

隆二「無理しなくていいよ」

陽葵「ううん、このままがいいの。だから・

着くまで離さないでいてほしい」

隆二「分かった」

○駅のホーム

電車が止まり、扉が開く。

隆二と陽葵が手を繋いで出てくる。

2人の表情からは緊張が見える。

陽葵、ゆっくり手を離す。

陽葵「・・・ありがとう」

隆二「うん」

気まずさと照れくささで、顔を背けて
いる2人。

○雑貨屋

レトロな雰囲気店内。

アンティーク調の雑貨が並ぶ。

隆二と陽葵、商品を見て回ってる。

陽葵「あった」

小物入れを手に取り眺める。

隆二「かわいいね」

陽葵「うん。じゃあ買ってくる」

レジに向かう途中でアンティークの置

時計を見つけ眺める。

時計は使い古されたような年季が入っ
っている。

隆二「良い時計だね」

陽葵「この古い感じが好き。時計の刻まれた時間が映しだされてるみたいで」

陽葵、時計を手に取って見ると、傷が少しついている。

陽葵「アンテイクってさ、ついた傷が年月をかけて良さに変わっていく。人もそうであってほしい。悲しみや痛みが、その人にしかない強さに変われるように」

隆二「変わるよ」

陽葵「うん」

○走る電車内

隆二と陽葵、座席に座っている。

陽葵、紙袋を抱え眠っている。

隆二、陽葵の寝顔見て優しく微笑む。

○中央通り（夕）

隆二と陽葵、歩いている。

陽葵の手には紙袋。

陽葵「電車で遠くに行くの初めてだから、疲

れて寝ちゃった」

隆二「気持ちよさそうに寝てたよ」

陽葵「寝顔見た？」

隆二「隣に座ってるから」

陽葵「変な顔してなかった？」

隆二「フフ」

陽葵「何その笑い」

隆二「何でもない」

陽葵「ねえ、何？」

道路を挟んだ反対側の歩道に悠斗、高橋、佐藤がサッカーのユニフォームを着て歩いている。

陽葵、悠斗たちに気づく。

悠斗はリュックを3つ持っている。

悠斗「ねえ、もういい？」

佐藤「悠斗が持ってくれるって言ったんだろ」

悠斗「少しだけって言ったじゃん」

高橋「いいじゃん。友達だろ？」

佐藤「悠斗優しいから何でもしてくれるよな」

悠斗、俯く。

陽葵、隆二に袋を預け

陽葵「ごめん、持ってた」

陽葵、道路を渡ろうとすると

茜の声「コラ！」

と、悠斗の後ろからユニフォームを着た西村茜（11）が走って来る。

陽葵、立ち止まる。

茜「また悠斗に持たせてる。自分たちの荷物でしょ。自分たちで持ちなよ」

高橋「うるせいな。関係ねーだろ」

茜「自分ばかり楽するな。いつも悠斗に任

せてるじゃん」

佐藤「悠斗が持つって言ったんだよ」

陽葵の声「自分で持ちなよ」

高橋と佐藤、振り返ると陽葵が来る。

悠斗「お姉ちゃん」

陽葵「誰かのものを背負うって、自分が背負ってるものより重いんだよ」

高橋と佐藤の前に隆二も来る。

隆二「自分で背負えるものは自分で背負う。」

本当に抱えきれない時だけ頼ればいい。もし余裕があるなら一緒に背負ってあげる。分かった？」

高橋と佐藤、悠斗の所に行く。

それぞれ自分のリュックを受け取る。

茜「もう悠斗に全部押し付けない。いい？」

高橋「うっせえな。分かったよ」

高橋と佐藤、しょぼくれて去って行く。

茜、隆二と陽葵のもとに駆け寄る。

茜「ありがとうございます。ほら悠斗も」

悠斗、駆け寄って来る、

悠斗「お姉ちゃん、ありがとう」

茜「知り合い？」

悠斗「うん。あっ、あと彼氏さんもありがとうと

うございました」

隆二「え？」

陽葵「いや、そういうのじゃなくて」

茜「どっちから告白したんですか？」

悠斗「たぶん彼氏さんだよ。お姉ちゃん冷め

てるところあるから、自分から言わないよ」

陽葵「うるさい」

茜「付き合うつてどんな感じですか？」

隆二「付き合っているとかじゃ・・・」

悠斗「お姉ちゃん淡泊だから、彼氏さん振り

回されてそう」

陽葵「殴っていいかな？」

隆二「落ち着いて」

茜「あっ、アニメもうすぐ始まっちゃうよ」

悠斗「今日最終回だ」

茜「お二人ともありがとうございました」

悠斗「お姉ちゃんまたね。彼氏さんも」

2人、走り去る。

陽葵「だから違うつて」

隆二と陽葵、目が合うつと照れくさそう

に顔を逸らす。

隆二「帰るか」

陽葵「うん」

○松田家の前の通り（夕）

隆二と陽葵、歩いている。

隆二「そうか、あの男の子が力を継ぐんだ」

陽葵「そう」

隆二「まだ小学生でしょ？」

陽葵「子供が力を継ぐの。大人の言うことに従ってくれるから。生まれは変えられない。そして生き方も。でも誰かが変えなければいけない。何かを犠牲にしても」

松田家の前に着く。

陽葵「今日はあるがと」

隆二「うん」

陽葵「じゃあね」

陽葵、門の中に入って行く。

隆二、陽葵の後姿を見ている。

○松田家・居間（夜）

陽葵、愛、麻美、松田、座卓を囲んで
いる。

座卓には豪華な食事とケーキが並ぶ。

陽葵、足元から紙袋を取り愛に渡す。

陽葵「はい」

愛 「プレゼント？」

陽葵、頷く。

愛 「ありがとう。開けていい？」

陽葵 「うん」

愛、袋の中からラッピングされた箱を
取り出す。

ラッピングを剥がし、箱を開けるとア
ンティーク調の小物入れが出てくる。

愛 「あー、私が欲しいって言ってたやつ。買
ってきてくれたの？」

陽葵 「うん」

愛、嬉しそうに小物入れを眺めている。

愛 「でも、どうやって買いに行ったの？」

陽葵 「電車」

麻美、陽葵を見る。

愛 「お姉ちゃん電車乗れないでしょ？フラッ
シュバックは？」

陽葵 「隆二もいたから」

松田 「この間言ってた男の子？」

愛 「そう、お姉ちゃんの彼氏」

陽葵「だから違うって」

麻美「陽葵、その人のこと好きなの？」

陽葵「何で？好きだったら諦めさせるから？」

麻美「伝統は守っていかなければいけない。

この家に生まれたら掟が全てなの」

陽葵「子供を犠牲にして得るものに、価値な

んてあるの？」

麻美「・・・」

愛「もう、私の誕生日に喧嘩しないでよ」

愛、ケーキを取り

愛「これ切ってくるね」

と言って、居間を出る。

松田、麻美を見ている。

○同・寝室（夜）

松田と麻美、ベッドに座っている。

松田「最初に会った時のこと覚えてる？」

麻美「お互い目も合わせないほど嫌がってた」

松田「親父に無理やり連れて行かれたから」

麻美「私は結婚させられるって知ってた。だ

から嫌われるように振舞ってた」

松田「全部無視してたよね」

麻美「それでも話掛けてきた」

松田「少しぐらい会話した方がいいかなと思
ったら、挨拶は返さない、喋りもしない。
だから話させてやろうって意地になってた」

麻美「結果、私が折れた」

○回想・日本庭園・20年前

松田と麻美、歩いている。

松田はスーツ姿。麻美は着物を着用。

松田「普段何されてるんですか？」

麻美、表情も変えずに前を見ている。

松田「趣味は何ですか？」

麻美「・・・」

松田、苛立ちが表情に出始める。

松田「好きな男性のタイプは？」

麻美「・・・」

松田「手が4本ある男性と目が4つある男性
だったら、どっちがいいですか？」

麻美、松田を見ようとするが止める。

松田「ブロッコリーに地球を侵略されるのと、カリフラワーに侵略されるの、どっちが嫌ですか？」

麻美の口元が少し綻ぶ。

松田「じゃあ、顔がブロッコリーになるのと、体がカリフラワーになるのどっちがいいですか？」

麻美「フフ」

松田、麻美の笑い顔を見て畳みかけるように問いかける。

松田「朝起きたら、隣にブロッコリーがいるのと、カリフラワーがいるのどっちが．．」

麻美、堪えきれずに笑いだす。

麻美「何ですか？ブロッコリーに侵略されるって。カリフラワーとほぼ一緒じゃないですか」

麻美、指で目頭を拭いながら笑う。

松田、麻美の笑った姿を見て微笑む。

○同・寝室（夜）

松田「固く縛られた結び目を解いた気分だった。この人のことをもっと知りたい、そう思った」

麻美、思い出に耽け表情が緩む。

松田「僕は麻美と結婚して良かったと思って。だから陽葵にも好きな人と結ばれてほしい。心の底から笑える相手と」

麻美「・・・」

松田「もう寝よっか、おやすみ」

松田、ベッド横にあるシェードランプを消し、横になる。

麻美、考え込んでいる。

○柴崎家・客間

陽葵と悠斗、座卓を挟み座っている。

悠斗の後ろには弘子が座っている。

座卓には開いた書物。

書物には禁止事項が描かれている。

一、悲葬の力を持つ者とその家系は

- 力で利益を得てはいけない
- 二、悲葬の力は同じ人間に一度だけとする
- 三、悲葬の力を求められたならば断わることを禁ずる（ただし、二の事項に該当する場合は三を優先とする）
- 四、悲葬の力を一〇年以上保有してはならない
- 五、悲葬の力を持つ者は継承式で次の後継に力を引き渡すこと
- 一族の掟
- 一、十年ごとに五つの一族で均等に力を継いでいくこと
- 二、一族間で意見が割れた場合、長たちで決を取り多い方に従う
- 三、必ず一族から長を出すこと
- 従わない場合その一族の長にこれまで背負った悲葬者の悲しみを背負わせる

悠斗「これを破ったら記憶が消えちゃうんだ」

弘子「全部消えるわけじゃないよ。その人間が一番大切になっている思い出だけは残る」

悠斗「僕だったら茜ちゃんと遊園地行った時だな。お姉ちゃんはある？大切な思い出」

陽葵「あるよ。どんな景色よりも綺麗な思い出が」

悠斗「きつと良い思い出なんだね」

陽葵「うん」

悠斗「そうだ、茜ちゃんがね一緒に花火大会行こうだって」

陽葵「私も？」

悠斗「あと一緒に居たお兄ちゃんも」

陽葵「分かった、聞いてみる」

○同・中央通り（夕）

陽葵と弘子が歩いている。

弘子「私は伝統とか歴史なんて終わればいいと思ってる」

陽葵、弘子を見る。

弘子「老いた者は過去で語り、若い者は今を

語る。そして変える力がある者は先を語る。
未来ある子に背負わせるべきじゃない。価値観なんて生まれた時代で変わる。今風で言えばナウくない」

陽葵「それも古い」

弘子「私も年食ったもんだ」

前から古賀と古賀洋子（30）が歩いて来る。

古賀「何してんだ2人で」

○古賀家・居間（夕）

陽葵、弘子、洋子、古賀、テーブルを囲む。

陽葵「外に出られるようになったんだ」

古賀「10年かかったけどな」

洋子「本当は継承式で力を引き渡すのを拒むつもりだった。でも掟を破れば記憶が無くなる。それが怖かった」

陽葵、洋子を見る。

洋子「陽葵ちゃんは元気そう良かった。私

はあの力を持ってから人間不信になった。
外に出るのも怖くなるくらい」

陽葵「・・・」

古賀「まだ人を知らない幼い子に力を持たせれば、必要のない猜疑心も生まれる」

弘子「難しいもんだね。実際に人を救っているから役には立ってる。だがそれは犠牲のもつとで成り立つ。じゃあその犠牲を払った人間は誰が助ける？神様ってのは残酷だね」

洋子「でもそれで良い生活が出来てる。誰も反対は出来ない」

弘子「みな共犯者だ。誰も止められない」

陽葵、考え込んだ様子。

○松田家・陽葵の部屋（夜）

陽葵、書物の禁止事項、五の項目を見
てる。

机の引き出しから一枚の画用紙を取り
出す。

画用紙には子供が描いた拙い桜の絵が

描かれている。

○ 駅前（夕）

駅前に和装姿の隆二、悠斗、茜。

悠斗「あっ、来た」

着物姿の陽葵が小走りで来る。

陽葵「ごめん、着付けに時間かかって」

隆二、陽葵の着物姿を見入っている。

陽葵、隆二の視線に気づき

陽葵「変かな」

隆二「ううん、似合ってる」

茜「お姉ちゃん可愛い」

悠斗「茜ちゃんも似合ってるよ」

茜「（照れくさそうに）ありがとう」

陽葵、2人のやり取りを見て微笑む。

隆二「行こうか」

4人、階段を上がって行く。

○ 河川敷・土手（夜）

陽葵と隆二、土手に座っている。

土手の下には屋台が並んでおり、多くの人で賑わっている。

隆二「明日だよ。悠斗君に力を継承するの」

陽葵「うん」

陽葵、屋台の方を見ると、悠斗と茜が楽しそうにしている姿が目映る。

陽葵「お祭りが嫌いだった。みんな友達や恋人と一緒に来るでしょ？楽しそうにしてるのを見たくなかったの。汚れたものばかり見て来たから」

悠斗と茜が屋台の方から走って来る。

悠斗の手には綿あめ。

隆二たちの前に座る。

茜「食べよ」

と、2人で1つの綿あめを食べる。

陽葵「人って記憶で作られてるんだと思う。

どんな思い出を持つかでその人が決まる。

花と一緒に。水をやれば美しく咲くし、無ければ枯れていく」

隆二、陽葵を見ていると屋台の照明が消

える。

悠斗「（振り向き）始まるよ」

周りの人たちが空を見上げる。

花火玉につけられた笛が河川敷に響く。

大きな轟音と共に花火が夜空を照らす。

歓声と共に次々と打ちあがる花火。

陽葵「ねえ、隆二」

隆二、陽葵を見る。

陽葵、花火を見上げている。

陽葵「今日のことは忘れないで。思い出とし

て残してほしい」

隆二「うん。忘れない」

陽葵「ありがとう」

隆二、再び花火を見上げる。

○柴崎家の前の通り（夜）

隆二と陽葵、歩いている。

その前を悠斗と茜が歩く。

茜「花火って一瞬で消えちゃうでしょ？その場所に残ってたらずっと綺麗なのに」

陽葵「だから見たいって思うんだよ。ずっと残ってたら色褪せていくけど、その時だけのものだからより綺麗に映る。美しく装飾されて思い出に変わり、また見たいと思う」

悠斗「僕はずっと残ってほしいけどな」

茜「お姉ちゃんの言葉聞いてた？」

悠斗「聞いてたよ。お肉をずっと置いてたら腐るけど、食べたら美味しいから、また食べたくなるってことでしょ？」

茜「全然違う」

隆二、2人のやり取りを見て微笑む。

悠斗の家の前に着く。

悠斗「お姉ちゃんまた明日ね。お兄ちゃんもまた一緒に遊ぼう」

隆二「うん」

茜「おやすみなさい」

悠斗と茜、玄関に向かって行く。

陽葵、淋しげな眼で2人を見ている。

○忍城敷地内（夜）

ライトアップされた和傘が並んでいる。
そこを隆二と陽葵が歩いている。

陽葵、憂鬱気に俯いている。

隆二「悠斗君はまだ分かってないだろうね」

陽葵「悲しみって1つだけじゃない。大切な人を失ったり、苦痛を伴う出来事、人それぞれで痛みが変わる。そのすべてを背負ってきた。私には縫れるものがあつたから、心が壊れずにいられた」

隆二「俺達が悠斗君の支えになろう。真っ直ぐ歩いていけるように」

陽葵「・・ねえ隆二、うち寄ってかない？」

○松田家・居間（夜）

愛、麻美、松田、座卓を囲む。

松田、そわそわしている。

愛「お父さん、落ち着いて」

松田「もし付き合ってたらどうする？お父さんとか呼んできたらどうしよう」

愛「気が早い」

松田「お父さんぽくした方がいいよね？」

愛「お父さんぽくしなくてもお父さんだから」

松田「そうか、僕はお父さんだからお父さん

ぽくしなくてもお父さん。だからお父さん

ぽくしなくていいのか」

愛「どんだけお父さんにお父さんトッピング
するの」

麻美、二階を見上げる。

○同・陽葵の部屋（夜）

陽葵、机の引き出しから桜が描かれた

画用紙を取り出し隆二に渡す。

隆二「これ・・・」

陽葵「拙い桜の絵を褒めてくれた女の子。私
のこと」

隆二、驚いて言葉が出てこない。

陽葵「みんなで見えた桜の絵、前から知ってた。

それであるコメントも読んだ。だからこの

学校を選んだの」

隆二「俺の絵って分かったの？」

陽葵「絵に描かれた子供を見て分かった。同じ服着てたし、手を繋いでたから。実は隆二のこと最初から知ってた。毎年あの場所で描いてたでしょ？理由がどうあれ嬉しかった。あの頃の思い出が生きてるようで」

隆二「毎年来てたの？」

陽葵「ずっと話しかけたかったけど出来なかった。覚えてる？その絵を貰った後に私が泣いこと」

隆二、記憶を辿り思い起こす。

○回想・さきたま古墳公園・広場

満開の桜が広場に並んでいる。

陽葵、嬉しそうに桜の絵を見てる。

隆二、陽葵を見てる。

陽葵「また描いてくれる？」

隆二「来年はもっと上手なの描く」

陽葵「約束だよ」

隆二「うん」

2人の前を中学生くらいの女の子が通

り過ぎる。

女の子の手首には包帯が巻かれている。

陽葵、女の子を見ると涙ぐむ。

隆二「どうしたの？」

すると声を出して泣き出す。

隆二「大丈夫？」

声を掛けるが泣き止まない。

隆二、陽葵の手を握る。

隆二「泣き止むまで握ってあげる」

陽葵、鼻をすすりながら

陽葵「ありがとう」

隆二「1人で来たの？」

陽葵「家出してきた」

隆二「何で？」

陽葵「やりたくないことやらされたから」

隆二「そっか」

陽葵「1人で来たの？」

隆二「うん。桜が散ったら誰も来なくなるか

ら、忘れないように絵を描きに来た」

陽葵「じゃあ私も忘れない」

隆二「桜が寂しくならないように2人で覚えてよう」

陽葵「うん。絶対に忘れない」

隆二と陽葵、桜を見上げる。

○松田家・陽葵の部屋（夜）

隆二、桜の絵を見ている。

陽葵「あの時初めて悲葬の力を使った。それから人の悪い部分ばかり見るようになって、裏切られるのが怖かった。その思い出だけは汚したくなくて、綺麗なままでいてほしかった。桜のように散ってしまわないように」

隆二「綺麗なままでいられてる？」

陽葵「あの頃よりも綺麗に咲いてる」

隆二、微笑む。

○同・居間（夜）

愛、麻美、松田、座卓を囲んでいる。

襖が開くと、陽葵と隆二の姿。

隆二「遅くまで申し訳ありませんでした」

愛「大丈夫、気をつけて帰ってね」

隆二「うん」

愛、松田を見て顎で指示する。

松田「えっ、あー、うん、うん」

愛「何それ」

麻美、隆二を見てる。

隆二「お邪魔しました」

襖が閉まる。

愛「ちゃんとしてよ」

松田「て言われても」

○同・門（夜）

隆二と陽葵、向かい合っている。

隆二「おやすみ」

陽葵「おやすみ」

隆二、去って行く。

陽葵「隆二」

振り返り陽葵を見る。

陽葵「ありがとう。あの頃の思い出のままい

てくれて。私の宝物だった。初めて人を好きになれたから」

と言い、家の中に入って行く。

隆二、陽葵の後姿を見ている。

○松田家・居間（夜）

愛、麻美、松田、テレビを見てる。

そこに陽葵が入って来る。

陽葵「お母さん、ちょっといい？」

○公園（夜）

陽葵、ベンチに座っている。

陽葵「そういう事だから」

と言い、立ち上がり去って行く。

ベンチに残された麻美、目から涙がこぼれる。

○高等学校・図書室

隆二、桃花、拓海、智子、机を囲む。

桃花「陽葵今日だね」

拓海「やっと解放されるんだな」

智子「そうだね」

隆二、スマホを取り出す。

○走る車内

運転席に松田。助手席に和装姿の麻美。

後部座席には陽葵と和装姿の愛。

陽葵のスマホにLINEの通知音。

開くと隆二から、

「もう1人で背負わなくていいから。

辛いことがあったら一緒に背負う。涙

を流す思い出じゃなく、笑って振り返

れるような思い出を作ろう」

陽葵、LINEを閉じる。

陽葵M「ありがとう、隆二」

○橋本家・客間

弘子と古賀、座卓に着いている。

襖が開くと、巫女装束を着た陽葵。

弘子「どうした？」

陽葵「2人にお願いがあるの」

○同・継承の間

広々とした部屋には縁側があり、そこには赤い絨毯が敷かれている。

ガラス戸は全て開かれており、そこから庭園が見える。

陽葵と悠斗が並んで座っており、対面には千代子。

陽葵たちの後ろには岩崎、柴崎、弘子、古賀、愛、麻美、美穂が座っている。

全員和装を着用している。

陽葵と悠斗の前にはそれぞれ三方が置かれており、その上には盃と針。

千代子「継承の儀を執り行うにあたり、現継承者の背負った悲しみを浄化し、後継の魂を清める」

千代子、ひざ元の三方に置かれたお銚子を手に取り、悠斗の前に着く。

悠斗、盃を取ると水が注がれる。

千代子、陽葵の前に移動する。

陽葵、盃を取ると裏返しにして三方に強く置く。

千代子「何をしてる」

陽葵「継承はしない。私で終わらせる」

一同、驚いた様子で陽葵を見る。

千代子「どういうことだ？」

陽葵「犠牲の上に成り立つ発展など終わらせるべき。上に立つ者が潤いを得て、支えている者が朽ちていく。過去が未来を奪い、自分たちが望む桃源郷を作っていく。でもそこにあるのは悲しみで萎れ、咲くことを知らない蕾だけ。根があるからこそ美しい花を灯す。涙の数だけ光が消えていく」

岩崎「伝統があるんだ。数百年の歴史をたった1人の子供が変えるなんて許されない」

古賀「歴史や伝統というものは時代と共に変わっていく。もう私たちが舵を取るべきではない。いつからか間違った道に進んでしまった。それを正すのは、後の時代を見据

える者。これ以上傷を負うものは出してはならない。ここで終わりにしよう」

千代子「次の者に継承しないということとは、掟を破ることになる。反すれば、お前の記憶が失われるぞ」

陽葵「分かつてる。その上で決めたから」

岩崎「お前も力によって恩恵を受けているだろう。ならば伝統に従うべきだ」

弘子「先祖や親が受けてようが、子にそれは関係ない。これから生まれてくる子どもだ。私たちは与えられるべきでない恩恵を受けすぎた。ここで終わらせるのが妥当だろ」

岩崎「孫が継承するからそう言ってるだけだろ。伝統に私情を挟むな」

弘子「ごちゃごちゃうるさいね。なら掟に従い、一族の長で決を採ろうじゃないか」

岩崎、麻美を見る。

岩崎「いいだろう」

弘子「じゃあ決を採る。悲葬の力をここで終わらせるべきだという者は挙手してくれ」

弘子と古賀、手を挙げる。

陽葵、麻美を見る。

岩崎「決まりだな。今まで通り悲葬の力は継

承・・・」

弘子「では反対の者は」

岩崎「おい、もう決まっただろ」

弘子「分からだろ」

千代子、手を挙げる。

岩崎「俺もだ」

と言い、手を挙げる。

麻美、目を瞑っている。

岩崎「おい、早く上げろ」

弘子「岩崎、少し黙りな」

岩崎、狼狽える。

一同、麻美を見る。

麻美「私は・・・歴史を終わらせるべきだと思
う」

岩崎「娘の記憶が消えるんだぞ」

麻美「この力は人を救うためにあったはずで
す。私利私欲に溺れ、神の目を欺き、子供

達の心を壊した。本来ならば孫や子の未来のために我々が尽くさなければいけない。だが今はどうです？孫や子が一族の犠牲になり、伝統や繁栄などの言葉で蝕まれていく。正しき道に進めぬのなら、正しき道を造る。それが一族の長である、私の務めだと思っています」

千代子、目を瞑る。

弘子「決まりだな」

岩崎「ダメだ、我々や先祖が一族を守ってきたんだぞ。ここまで繁栄させてきたものを、たかだか17歳の娘の意見で変えるなど言語道断。私は絶対に認めな・・・」

千代子「見苦しいぞ岩崎。決を取った結果だ。」

一族の恥じになりたくなければ受け入れろ。反すれば、長のお前に罰が下る」

岩崎、肩をすぼめ座り込む。

千代子「式は夜に執り行う。その際に現継承者が力を放棄することを宣言し、歴史に幕を閉じる」

千代子、陽葵を見る。

千代子「想いを伝える相手もいるだろう」

千代子、部屋を出て行く。

悠斗「お姉ちゃん・・・」

陽葵、悠斗に微笑む。

愛、陽葵を見てる。

○同・客間

陽葵、愛、麻美、松田、座卓を囲む。

愛「どういうことか分かってるの」

陽葵「知ったうえで選んだこと」

愛「何で言ってくれなかったの？」

陽葵「・・・」

麻美「陽葵が覚悟して決めたこと。尊重して

あげなさい」

愛「お母さん知ってたの？何で止めないの？」

松田「ちよつと待って、いったい何のこと？」

愛「お姉ちゃんが継承しないと宣言した」

松田「継承しないとどうなるの？」

愛「掟を破ることになる。その代償として、

人に関する記憶を全て失う」

松田「失うって・・・」

愛「今まで会ってきた人、学校の友達、そして家族も・・・」

松田「何で？何で陽葵が記憶を失くさないといけないの。継承すればいいんだよね。まだ間に合うなら今からでも・・・」

陽葵「もう決めたことなの。この力は大きな傷と痛みを伴う。誰かがいずれ止めなければいけない。これ以上の犠牲を出さないために」

愛「お姉ちゃんじゃなきゃダメなの？」

陽葵「枝に咲く花が散ったとしても、再び咲かせてくれる人たちがいる。きっと私じゃないとダメなんだと思う。だから神様は、私の側に良い人たちを置いてくれた」

愛「忘れるんじゃないよ。消えるんだよ。もう思い出せないんだよ。今まで話したことも、一緒に桜見たことも、隆二君たちのことも、全部無くなっちゃうんだよ。そしたら赤の

他人と変わらないじゃん」

陽葵「それは違う。記憶が消えても愛は私にとって大切な妹。それだけは忘れないで」

愛「ずるいよ。お姉ちゃんはそんな大事なことも思い出せなくなるのに」

陽葵「・・・ごめんね」

愛、涙ぐみ、陽葵に背を向ける。

愛「お姉ちゃんのバカ」

と、顔を崩しながら泣いている。

○同・敷地駐車場（夕）

数台の車が停まっている。

麻美と松田、車のボンネットに座っている。

松田「何で止めなかったの？」

麻美「もちろん止めた。許せることではないから」

松田「じゃあ何で？」

麻美、陽葵とのやり取りを思い出す。

○回想・公園（夜）

陽葵と麻美、ベンチに座っている。

麻美「そんなこと許せるわけないでしょ」

陽葵「でも終わらせなければいけない。この力を持ってから人を信用できなくなった。心を壊された人間もいる。いずれ私の子供も同じ運命を辿る。親である私が、子供の未来を奪うことなどしてはいけない」

麻美、陽葵から視線を外す。

陽葵「この10年の苦しみは、力を持った者にしか分からない。長く続いた負の歴史で子供たちの光は奪わせない。だから私が終わらせる。大きな犠牲を払ってでも」

○橋本家・敷地駐車場（夕）

麻美「親ならば止めなければいけない。でも、親として止めることは出来なかった。陽葵が継承者に決まった時、いつか心が壊れると覚悟してた。悲葬とはそういう力だから。本来ならば反対して子を守るのが親として

当然の務め。だけど歴史と伝統を重んじるあまり、大切なものを見失っていた。先ある子の未来を願わなくてはいけないかったのに、過去の仕来りに縛られていた」

麻美、空を見上げる。

麻美「全てのものは変わっていく。花も空も時代も。一番変わらなければいけないのは私たちだった」

松田、空を見上げる。

○同・和室（夕）

陽葵、縁側に座り、夕日に染まる庭園を見てる。

そこに愛が来て、隣に座る。

愛「いいの？隆二君たちに言わなくて」

陽葵「言ったら止められる。それに迷ってしまっ
うから」

愛「でも説明しないといけないんだけど」

陽葵「お願いね」

愛「怒るんじゃない？何も言わずに記憶から

消されたら」

陽葵、スマホを取り出し、愛に渡す。

陽葵「私の記憶が消えた後、隆二にこう伝えて。あの思い出があったから心を壊さずにいられた。ありがとうって」

陽葵、立ち上がる。

陽葵「スマホのロックは私の誕生日」

と伝え、去って行く。

愛、スマホを見てる。

○同・廊下

陽葵、歩いていると前から弘子と古賀。

弘子「これで良かったのかい？」

陽葵「誰かが終わらせなければいけない。その誰かが私だけ」

陽葵、去って行く。

弘子と古賀、陽葵の後姿を見てる。

○ファミレス（夕）

隆二、桃花、拓海、智子、席に着いて

いる。テーブルにはドリンク。

桃花「もう終わったかな、陽葵」

隆二のスマホが鳴り画面を見ると、陽葵と表示されている。

隆二「陽葵からだ」

拓海「今、終わったんじゃないね」

隆二、電話に出る。

隆二「もしもし・愛ちゃん？陽葵は？
え？」

○走るタクシー・車内（夕）

助手席に隆二。

後部座席に桃花、拓海、智子が座っている。

桃花「それどういうこと？」

隆二「陽葵が継承を断ったらしい」

智子「断るとどうなるの？」

隆二「掟を破ることになり、その代償として人に関する記憶が失われるらしい」

拓海「は？意味分かんねえんだけど」

隆二「俺たちの記憶も全部消える」

桃花「うそ・・・」

○橋本家・継承の間（夜）

陽葵と悠斗が並んで座っており、対面には千代子。

陽葵たちの後ろには岩崎、柴崎、弘子、古賀、愛、麻美、美穂が座っている。

陽葵と悠斗の前にはそれぞれ三方が置かれており、その上には盃と針。

愛、スマホを見る。

○同・敷地駐車場（夜）

松田、ボンネットの上に座っている。

門の所にタクシーが止まる。

隆二、桃花、拓海、智子が降りてきて

松田の所に走って来る。

隆二「愛ちゃんから連絡が来て、陽葵が・・・」

松田、察して

松田「来て」

○同・継承の間（夜）

千代子「では改めて継承の儀を執り行う。始めるにあたり、悲葬の力を持つ者に問う。力を次の者に渡し、再び10年の時を刻むか、掟に反し継承を取りやめ、力を放棄するか。その意思をここに宣言せよ」

陽葵「幾多の者を悲しみの底に落としたこの力を歴史と共に終わらせる。その代償として、我が記憶を神に引き渡す。力無くとも一族が繁栄することを願う」

陽葵、盃に入った水を見ている。

針を取り、人差し指に刺そうとすると

襖が開き、松田、隆二、桃花、拓海、

智子が入って来る。

陽葵、驚いた様子で隆二たちを見る。

岩崎「神聖な場だぞ。部外者は入るな」

松田「すいません。でも陽葵の友達が会いに来たんです。これを逃したらもう今の陽葵には会えないから」

岩崎「お前たちに入る資格はない。帰れ」

弘子「最後くらい良かろう。歴史も伝統も無くなるんだ。入れてやれ」

岩崎「ダメだ。儀式には一族以外入れてはならぬ。最後だろうがそれは許されない」

千代子「最後の挨拶くらいさせてやれ」

岩崎「でもな千代さ・・・」

千代子、強い目つきで岩崎を見据える。

岩崎、狼狽えながら再び座る。

千代子「入れ」

松田「ありがとうございます。入って」

隆二たち、陽葵の側に行く。

陽葵、視線を合わせられず俯く。

桃花「陽葵、本当に記憶が失くなっちゃうの？」

陽葵「・・・」

桃花「もう会えなくなるの？」

陽葵「記憶が失くなるだけ、また会える」

桃花「でも私たちのこと忘れちゃうんでし

よ？そんなの嫌だよ。何とかならないの？」

隆二、悠斗を見る。

陽葵「みんなのおかげで、見られるはずのな

い景色を見ることができた。こんなにも鮮やかで、心地よい場所がこの世界にあることを教えてくれた。人が嫌いで、曲がった見かたしか出来なくて、そのうえ不愛想で、こんなだから一生友達なんてできないと思ってた・・ありがとう、私の友達になっ
てくれて」

桃花、涙を流す。

陽葵「泣かないで」

桃花「無理だよ」

陽葵「最後だから笑って見送って。桃花の泣き顔で終わりにたくない」

桃花「じゃあ一生泣いてる。そしたら終わらないもん」

陽葵、立ち上がり桃花の涙を指で拭う。

桃花、陽葵を見る。

陽葵「桃花には感謝してる。あなたのおかげみんなと友達になることが出来た。最初はお互い嫌いだったと思う。でも今は心の底から桃花が好き。だから泣かずに見送って。」

桃花の悲しい顔見るのは辛いから」

桃花、涙を拭い

桃花「分かった」

陽葵「ありがとう」

陽葵、智子の前に来る。

智子「待って、今何か言われたら泣くから」

智子、息を整え

智子「大丈夫」

陽葵「智子と居るとすぐ落ち着けた。きつ

とみんなのバランスになってるんだと思う。

どんなことがあっても支えてくれるような、

そんな安心感のある智子が好き。ありがとう

う、一緒に居てくれて」

智子、涙ぐみながら

智子「陽葵もありがとう」

陽葵、拓海の前に来る。

拓海、緊張した面持ちで陽葵を見る。

陽葵「拓海は特にない」

拓海「おい」

陽葵「うそ。拓海がいたから沢山笑えた。こ

んな風に冗談を言うことも出来るようになった。今までの私からは想像もつかないこと。変えてくれてありがとう」

拓海「（照れくさそうに）うん」

陽葵、隆二の前に来る。

陽葵「あの思い出が無ければ、心が崩れていたと思う。あと一歩って所で繋ぎとめてくれた。隆二に会えた時は本当に嬉しかった。また思い出に触れられると思って」

隆二「昨日言ってくれたでしょ？この学校を選んだ理由。俺も一緒だった。初めて好きになった人に会えるかもしれないと思って」

陽葵、驚いた様子で隆二を見る。

隆二「住んでる場所も知らなければ、名前すら知らない。幼い頃の思い出なのに、あの時の感情は今でも心に残ってる。自分にとっても宝物だった。まさかその女の子が陽葵だとは思わなかったけど」

陽葵、手を差し出す。

陽葵「私は大切なものを失ってしまう。その

前にもう1度だけあの思い出に触れさせて」

隆二、陽葵の手を握る。

陽葵「思い出の人が隆二で良かった。同じ人を2度も好きになれたから。全て忘れてしまっても、きつとまたあなたを好きになる」

隆二、陽葵を見てる。

陽葵、手を離し後ろに下がる。

陽葵「この力を持ってから人を信じる事が出来なくなった。深い所で背を向けられたら、二度と戻ってこられなくなりそうで怖かったから。でも大切な人達が出来て、みんなにも優しさが温かいことを知った。私はみんなのこと忘れてしまう。わがままかもしれないけど、私との思い出は忘れないで。そして・・・また友達になつて」

桃花「絶対なる」

陽葵「またね」

と、隆二たちに背中を向け涙を零す。

千代子「では再び継承の儀を執り行う。血筋に關係のない者は外してくれ」

松田「みんな出よう」

隆二たち、部屋を出て行く。

隆二、部屋を出る際に陽葵を見る。

松田「行こう」

隆二「はい」

部屋を出て、襖を閉める松田。

陽葵、元居た場所に着く。

千代子「再度現継承者に問う。記憶を失い

その力を放棄するか」

陽葵、力強い目で

陽葵「これで終わりにする」

○さきたま古墳公園

桜の木の葉が枯れ落ち、枝だけとなつて
ている。

○松田家・玄関

愛、扉を開くと隆二、桃花、拓海、智
子。

拓海「よっ」

○同・陽葵の部屋

ベッドで眠っている陽葵。

囲むように隆二、桃花、拓海、智子、
愛。

隆二「まだ起きないんだ」

愛「あれからずっと。何も変わらない」

○回想・橋本家・継承の間（夜）

継承の儀

陽葵、人差し指を針で刺し、流れる血
を盃に一滴入れる。

盃を取り、血を入れた水を飲みほす。

盃を三方に置くと、陽葵が急に倒れる。

愛「お姉ちゃん」

陽葵のもとに駆け寄る愛と麻美。

麻美「陽葵」

陽葵、眠ったように動かない。

○松田家・陽葵の部屋

桃花「もう起きないってことはないよね？」

愛「初めてのことだから、誰も分からないみたい」

智子「そうなんだ」

愛「お姉ちゃん、今日誕生日だったんだよね」

桃花「そうなの？」

愛「祝ってあげたかった」

隆二、陽葵の顔を見る。

○雑貨屋

隆二、商品を見て回っている。

アンティーク調の置時計が目にとまる。

○中央通り（夕）

隆二、手に雑貨屋の紙袋を持って歩いている。

前から、悠斗と弘子が歩いて来る。

悠斗「あっ、お兄ちゃん」

○木村家・居間（夕）

隆二、悠斗、弘子がテーブルを囲む。

弘子「麻美んとこのお嬢ちゃん、まだ起きないみたいだね」

隆二「はい」

悠斗「お姉ちゃん大丈夫かな・・・」

隆二「大丈夫。きっと目を覚ます」

悠斗「そうだよね。したらお姉ちゃんにお礼言わないと。あつ、でも僕のこと覚えてないのか・・・」

隆二「陽葵が目を覚ましたら、また一緒に花火見に行こう」

悠斗「うん。その時は茜ちゃんも誘って、また4人で見に行こう」

隆二、微笑む。

悠斗「でも一番大切な思い出だけは残ってるんだっけ？」

隆二「そうなんですか？」

弘子「ああ。人の記憶だけ消えるのは人との関りで善悪が付くからだろう。正しい道を歩かせるには失う必要があった。だが何も無ければどこへ進んでいいか分からない。

間違った道に再び踏み込んでしまいかもしれん。そのために道しるべが必要となった。神は正しき道に進ませるため蓄は残した。何もない所に花は咲かないからな」

悠斗「もしそうだったら、きっとお兄ちゃんとの思い出だよ。お姉ちゃん覚えてるかも」
隆二「うん」

弘子、立ち上がる。

弘子「私は出掛けてくるよ」

悠斗「どこ行くの？」

弘子「年寄りの話し相手になってやらんとな」

○橋本家・継承の間（夕）

千代子、縁側に座り庭園を見てる。

弘子、庭園の方から歩いて来る。

千代子「人の家に勝手に入るんじゃないよ」

弘子、千代子の隣に座る。

弘子「まだ目が覚めないらしいよ」

千代子「事例がないからな。いつ目覚めるかは誰も分からない」

弘子「そーいや、羽村さんとこの娘と古賀の孫の縁談は無くなったみたいだな」

千代子「私がやめさせた。もう繋ぐ理由はないからな。古賀は文句を垂れとったが」

弘子「私は岩崎のことは嫌いだった。私利私欲の塊だったからね。でも千代さんは嫌いじゃなかったよ。一族の残したものを守りたかった。そうだろ？」

千代子「岩崎と同列にされては困る」

2人、軽く笑う。

千代子「いつか終わる日が来ると思っていた。

だが先祖が繋いだものを私の時代で終わらせたくなかった。どんな形であろうと、長く続いた仕来りを守るのが私の使命。そう思って生きてきたからな。でも少し楽になった。伝統や歴史などと体のいい言葉を並べてた頃より、空や花を見て綺麗と思えるようになった」

弘子「それは歳を取っただけだよ」

千代子「お互いにな」

千代子、口元を綻ばせながら庭園を眺める。

○松田家・玄関（夜）

愛、扉を開けると隆二が立っている。

隆二の手には雑貨屋の紙袋。

隆二「陽葵のプレゼント。今日中に渡したくて」

○同・陽葵の部屋（夜）

陽葵、穏やかな顔で眠っている。

隆二と愛、陽葵の顔を見ている。

愛「お姉ちゃん、隆二君がプレゼント買ってきてくれたよ」

陽葵、全く反応しない

愛「ダメか。いつそのことたたき起こすか」

隆二「いつか起きてくれる。それまで待とう」

愛「そうだね。ねえ、お姉ちゃんのプレゼント

ト何買ったの？」

隆二、紙袋を愛に渡す。

愛 「見ていい？」

隆二 「うん」

愛、紙袋からラッピングされた箱を取り出す。包装紙を取り、箱を開けるとアンティーク調の置時計が出てくる。

愛 「可愛い」

隆二 「それ、陽葵が好きって言ってた」

愛 「お姉ちゃんが？」

隆二 「ついた傷が年月をかけて良さに変わっていく。悲しみや痛みが、その人にしかない強さに変わってほしい。そう言ってた」

愛、時計を眺めている。

愛 「もう1つ理由があると思う」

隆二、愛を見る。

愛 「時計の針って同じところをずっと回ってるでしょ。離れたとしてもまた出会うことが出来る。何度でも。そんな理由もあったんじゃないかな」

隆二、陽葵の顔を見る。

○同・居間（夜）

麻美と松田、お茶を飲んでいる。

襖が開くと、愛と隆二。

隆二「遅くに申し訳ありませんでした」

松田「ありがとね。誕生日プレゼント持って

きてくれたんでしょ」

隆二「はい」

麻美「隆二君、座って」

隆二、居間に入り座卓に着く。隣に愛。

麻美「隆二君にはお礼を言わないといけない」

隆二「お礼？」

麻美「陽葵が人を好きになれた。最後に思い

出を残してくれてありがとう」

松田「陽葵には心の底から好きになった人と

結ばれてほしかったんだ。そういう相手が

いてくれて嬉しかった」

麻美「いつか眠りから覚めた時、あなたが側

にいてほしい。お願いしてもいい？」

隆二「はい。もちろんです」

○村田家・隆二の部屋（夜）

隆二、スケッチブックを見てる。
色のない桜の絵が描かれている。

○高等学校・外観

蝉の声が鳴り響いている。

○同・2年1組

夏服を着た生徒達が授業を受けている。
隆二、陽葵の席を見るが姿はない。

○ファミレス

隆二、桃花、拓海、智子がテーブルを
囲む。

桃花「早く起きないかな陽葵」

拓海「起きても記憶がないわけじゃん。最初
なんて言えばいいんだろ？」

桃花「クラスメイトの清水拓海です」

拓海「それだとパンチないだろ」

智子「パンチ要らないから」

桃花「幼少期はナポリタンに育てられました。

清水拓海です」

拓海「いいな、それ」

智子「混乱するわ」

拓海「隆二、どうしたらいいと思う？」

隆二「今まで通りでいいんじゃない？陽葵が

居たあの時のままで」

桃花「そうだね」

○松田家・居間

麻美、洗濯物を畳んでる。

襖が開き制服姿の愛が入って来る。

麻美「おかえり」

愛「ただいま」

と言い鞆を畳みに放る。

麻美「部屋に持っていきなさい」

愛「うん」

といい、居間を出る。

○同・陽葵の部屋

愛、部屋に入って来る。

ベッドに視線をやると、目を見開き

愛「お母さん」

と言って、下に降りて行く。

○中央通り

隆二、歩いてると着信が鳴る。

スマホには「愛」と表示。

画面をタップし電話に出る。

隆二「どうした？」

愛の声「今どこ？」

隆二「帰ってる途中」

愛の声「公園に来てもらっていい？」

○さきたま古墳公園・広場

隆二、広場に向かって歩いて来る。

愛と麻美の姿を捉え会釈をする。

愛が体を横にずらすと陽葵の姿が目

映り、その場に立ち尽くす。

愛、隆二のもとに駆け寄って来る。

愛「お姉ちゃんが隆二君に会いたがってる」

隆二「覚えてるの？」

愛、首を横に振る。

愛「私とお母さんのことも覚えてない。でも1つだけ思い出が残ってた。この場所での人に会いたって」

隆二、陽葵を見る。

愛、隆二の手を取って

愛「来て」

と、陽葵のもとに駆け寄って行く。

愛、陽葵の前に隆二を立たせる。

愛「隆二君。お姉ちゃんのクラスメイト」

陽葵、隆二を見てる。

隆二「俺のこと覚えてる？」

陽葵、首を横に振る。

隆二「そっか・・・」

陽葵「小さい時にここで一緒に桜を見た男の子がいます。その子は私に桜の絵をくれました。私が泣いている時、手を握ってくれました。その記憶だけが残ってました」

愛「隆二君だよね？」

隆二「うん。陽葵と初めて会った時の思い出」

陽葵「その思い出の中にと心地良かった」

麻美、愛の肩を軽く叩く。

愛、麻美の視線を察して

愛「私たちは外すね」

愛と麻美、去って行く。

隆二、座ってカバンの中からスケッチ

ブックを取り出し、陽葵に渡す。

隆二「見て」

陽葵、隆二の隣に座りスケッチブック

を開くと、拙い桜の絵が描かれている。

一枚一枚捲っていく。

隆二「その思い出の絵は下手だったでしょ？」

だからもっと上手くなって、陽葵に渡した

かった。喜んでる顔が見たくて」

陽葵「上手です」

隆二「ありがとう」

陽葵、桜の木を見る。

陽葵「思い出の中では桜を見てる人がたくさ

ん居ました」

隆二「満開の時だけだから、人が来るのは」

陽葵「咲いてる時は人が集まり、散ってしま
ったら離れて行く。そこに何も無かったよ
うに忘れ去られる。どんな気持ちなんでし
よう？」

隆二、陽葵を見る。

× × ×

(フラッシュバック)

隆二「桜ってさ、咲いてる時はみんな見に来
るけど、散った後は来なくなる。そこに何
も無かったように忘れ去られていく。どん
な気持ちなんだろう」

陽葵「思い出してほしいからまた色づいてい
く。忘れ去られるのは辛いから」

× × ×

隆二、涙を流す。

するとそっと手を握られる。

陽葵を見ると恥ずかしそうに下を向い
ている。

隆二「ありがとう」

と言いつた後、桜の木を見上げる。

隆二「桜も辛いと思う。自分はここにいるのに離れて行く。もう二度と会えないかもしれないって。でも、枯れてしまっても花は咲くことができる」

隆二、スケッチブックを一枚捲ると、色の付いてない桜の絵が描かれている。

カバンの中から色鉛筆を取り出す。

桃色の鉛筆を取り出し、陽葵に渡す。

隆二「塗って」

陽葵「私が塗るんですか？」

隆二「うん」

陽葵、桜の絵に色を塗る。

少し塗ったところで

隆二「あっ、そこまで」

陽葵「これでいいんですか？」

隆二「少しづつ塗っていく。今はまだ蕾だから。でもいつか、散る前よりも綺麗な花を咲かせる。たくさん笑ってくれるように。」

もう1度好きになっ
てくれるように」

陽葵、桜の木を見上げる。

陽葵「咲きますかね？綺麗な花が」

隆二「咲くよ。絶対」

隆二と陽葵、桜を見上げる。

タイトル「思い出は桜のように散り色づいて
いく」